

周辺からの記憶 18

～2014年3月NYで～

村本邦子（立命館大学）

2018年2月25日（日）、「東日本家族応援プロジェクト 2017」シンポジウムは、団士郎さんの退職記念とドッキング企画で、「団士郎先生退職記念シンポジウム：家族と漫画と東日本大震災と」として開催し、ずいぶんたくさんの方が来てくださった。団さんの講演もそれらしく、自分の人生と仕事をふり返り、そのなかでこのプロジェクトがどんな意味をもたらしたかということをお話してくれたので、聴きながら、私も自分の人生と仕事を重ね合わせていた。成人してからの前半は、女性ライフサイクル研究所の設立1990年から所長を退任するまでの24年間、その概要は、最初のマガジン連載「女性ライフサイクル研究所 20周年を迎える」に書いた。後半は、開設2001年から勤め始めた立命館大学応用人間科学研究科で、来年度から人間科学研究科として生まれ変わる。その間の16年を団さんと一緒に仕事してきたことになる。私にとっても、ひとつの大きな区切りである。

今、研究室や京都の家の引っ越しを前に、終活というには少し早いかもしれないが、身辺整理をしようという気分になっている。関心の赴くまま、のべつまくなし集めた物を整理して、生きている間にはもう使わないだろうものを処分し、自分にとって価値があるはずなのに十分活用せず忘れていたものを掘り起こす。知識や経験についてもそうしよう。貴重なこのプロジェクトの記録も、今後もっと活かしていけるよう、何か考えなければ。

今回の連載は、このプロジェクト最大のスピノフ企画とも言えるNYでのプロジェクトの話である。

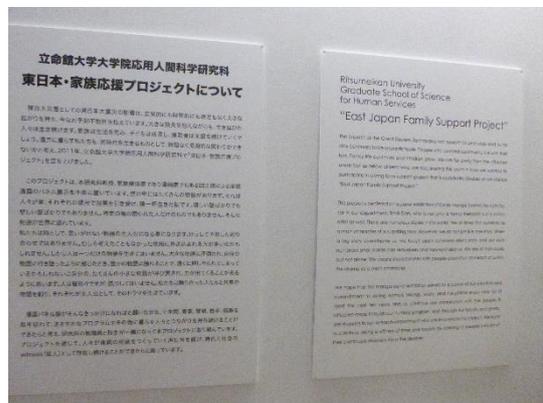


<2015年3月NYへ>

2015年3月、団さんがニューヨークで漫画展を開催することになった。1月末、中村さんがいきなり「我々も一緒に行きましょう」と言い出して、急遽、合流することにした。せっかくなので、現地で少しでも有意義な交流ができたらと、あちこちのツテを頼って、複数の企画が立ちあがった。

3月6日、成田経由でニューヨークへ飛ぶ。忘れもしない4年前の3月12日、震災が起きた翌日に、同じ経路でニューヨークへ飛んだ。あの時の緊迫した異様な雰囲気は、とても言葉で言い表せない。成田では大きな余震があつて、携帯の警報が鳴り響いた。断片的に衝撃的な映像が眼に飛び込んでくるが、状況を飲み込むことができないまま、大きな不安と恐怖を抱えて、飛行機に飛び乗った。訪問先のイエール大学では、口々に見舞いの言葉をかけられ、戸惑った。こんなふうに4年後を迎えるなんて、あの時は思いもしなかった。

風の影響で1時間以上早く JFK に到着したが、雪の影響もあつてシャトルバスは2時間以上かかり、ようやくホテルに到着。漫画展は3月5日からスタートしている。荷物を置いて、早速、メトロで会場に向かう。天理文化協会のギャラリーだが、アクセスもよく、きれいな展示となっている。外からガラス越しに、さりげなく中が見えるのもよい。大賑わいというほどではないが、次々と訪問客がある。18時よりオープニングパーティィ。





<3月8日 ほくほく会 追悼式>

「ほくほく会」はニューヨークにある東北6県と北海道の県人会で構成されている。毎年、東日本大震災の「追悼式」を開催しており、第三回目を3月8日13時半～17時、ニューヨーク日系人会館にて開催。およそ百人が参加した。

第一部では、在NY総領事高橋礼一郎大使、NY宮城県人会佐々木健二郎会長、NY兵庫県人会大西哲也会長の挨拶の後、被災地からの声として、最初に「『東日本大震災津波被災地への家族応援プロジェクト』から見る被災地の現状」の報告をした。15分という貴重な時間を頂いたので、わかりやすくコンパクトに伝えることができるよう、ずいぶん悩みながらパワーポイントを準備した。

「私たちの大学院では、心理、教育、福祉、医療などさまざまな対人援助職者を養成しています。

私自身は、二十数年にわたり、臨床心理士として、現場で女性や子どものトラウマ支援をしてきました。回復のために専門家にできる支援など微々たるもので、

3月7日、ギャラリーで「ほくほく会」追悼式でのプレゼン打ち合わせ、あわせて10日報告会の打ち合わせをする。

夕方は、総領事館で行うJAMSNET講演会の打ち合わせを兼ねた関係者交流会に参加。活動準備OKだ。

できることは証人 (witness) として存在し続けることに尽きると考えています。原発事故について、それまで関心を向けてこなかった自分の責任を考えました。阪神淡路大震災の経験もあり、忘れることなく、遠く京都から、細く長く関心を持ち続けたいと思いました。院生たちにも、社会的問題に向き合う力と援助とは何なのか問い続ける姿勢を学んで欲しいと思っています。そこで、このプロジェクトを立ち上げました。

内容としては、東北4県を十年訪れ、現地の支援機関と協働し、家族漫画展と対人援助プログラムを実施することで、顔の見える出合いを重ね、関係を育て、被災と復興の証人 (witness) となり、双方のコミュニティの力を活性化することです。漫画展とともに、大きな復興の物語の陰にあるたくさんの小さな物語に耳を傾け、豊かで多様な物語が語られることを応援できる存在になりたいと思っています」ということで、毎年の実施状況と今年度の各地の写真を紹介した。

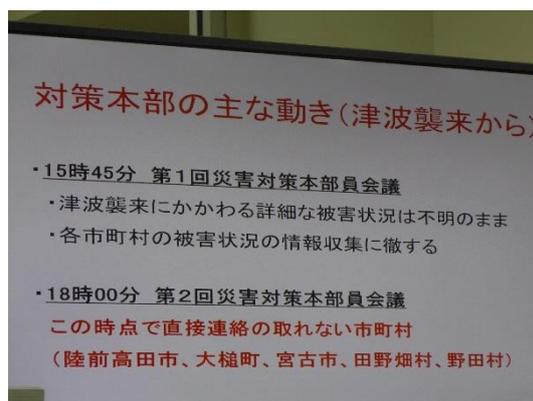
遠く NY から故郷を思う人々に懐かしい風景を届けることができたらと思ったのと、被災地で頑張っておられる女性たち、多賀城のおおぞら保育園の黒川恵子さんや飯館村の榎久里珈琲の市澤美由紀さんのことなども伝えたかった。参加者の中に市澤さんをご存知の方がおられたそうで、連絡を取り合うなど嬉しいご縁の拡がりもあった。小さなスペースではあったが、漫画パネルを展示し、冊子の配布も行った。



続いて「東日本大震災風化防止プロジェクト・メモリー・スピーチ・コンテスト」銀賞受賞者の高橋匡美さん(宮城県)による「石巻市南浜町～父と母を亡くして～」。高橋さんは、石巻南浜町の実家にいた両親を亡くした。震災3日後、まさに地獄と化した被災地に入り、母の遺体を見つけたという。その後、青いビニールシートに不造作にはった身元不明人の写真のなかに父を見つけた。イギリス留

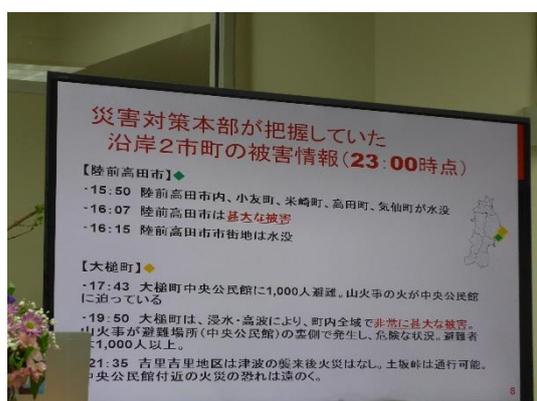
学中という息子が母をサポートしていたが、被災時は高校生で、一緒に被災地へ行き、「戦争の後？」と言ったというエピソードも出てくる。

郡山市「移動保育ポッケア」理事長・上國料竜さんによる「福島の子どもの今」ビデオレポートでは、福島の人たちの声を届ける、当事者たちを招いて話してもらえることがありがたいと言っていた。そして、岩手県人会・クレアニューヨーク事務所所長補佐・松田耕一さんのスピーチ。当時は大槌の役場に勤めていたということで、発災直後の災害対策本部の動きを紹介した。緊迫した雰囲気はひしひしと伝わり、非常にリアル。



その後、ニューヨーク仏教連盟会長中垣顕實法師の法話と読経があり、14時46分に一同で黙祷した。

第二部では、北海道ゆかりの会・道走会・山崎綾子さんによる“Run for Japan”、福島県人会・大沢泉さんによる「ふくしまの花ポスト」のレポートに続いて、民舞座による“ふるさとの踊り”（「相馬盆歌」「大漁唄い込み」「盛岡さんさ踊り」「新タント節」）があった。相馬盆歌、大漁唄い込みなど、豊作や大漁を祝うもので、踊りながら泣いておられる女性たちがおられた。最後は、混声合唱団ともによる合唱（「くすのき」「ジェリコの戦い」「見上げてごらん夜の星を」）だった。





お世話役の方から、「ほくほくの会は北の人間の集まりなので、派手なことが苦手な会の雰囲気はとても地味ですが、心の温かい我慢強い人達ばかりです。そういう会が主催する追悼式なので、手作りのささやかな、でもほのぼのとした会となって今年で四年目を迎えました。私達の合言葉は、『忘れないこと、続けること』です。NYから被災地にエールを送る、という賑やかし

いものではありません。故郷の復興を、遠く離れたこの街から、これからずっと絶えることなく見守って行く、いえ、見守らせていただく、そんな気持ちでこれからも続けます」というふうに聞いていた。追悼式に集うみなさんの声に耳を傾けながら、また踊りや合唱を見ながら、遠く離れていても、あるいは逆に遠く離れているからこそ、故郷の被災を悼み、共に心を寄せつながりを感じられる場が強く求められてきたのだということがひしひしと伝わってきた。

こんな人々の思いがまた東北に届くといいなと思うし、ささやかながら私たちにも届けることができるはずだと思う。それもまた証人としての役割だろう。会場で、NYから東北へのメッセージを集めた。

<Together for 311 追悼式>

同日、NYでは市内各所で「追悼式典」が開催されており、ほくほく会での追悼式の後、16時45分からクリスチャン・サイセンス教会で開催される「トゥギャザー・フォー・311 追悼式典」にも参加した。こちらは、「フェロシップ・フォー・ジャパン」主催のもので、五百人近く集まる大きな集会だった。代表のAK(柿原朱美)さんは、ニューヨーク在住のシンガー・ソングライター、「4年たった今でも、仮設住宅で生活している人が8万人以上います。現地の人々から、忘れてない人がいることが心の支えです」という声

を聞きました。震災を風化させてはいけません」と訴えた。

黙祷の後、在NY日本国総領事高橋礼大使、NY 福島県人会藤田小夜子会長、宮城県塩釜市の高橋匡美さんらのスピーチがあつて、みなさん梯子しながら追悼集会に参加しているのだった。追悼集会を結ぶネットワークとも言えるのだろう。AKさんが関わってこられた福島県相馬市「みなと保育園」の園児たちが、将来の夢を書いた紙を持って、「私たちは、夢に向かって元気で頑張っています！ニューヨークの皆さんありがとう！」というビデオメッセージもあつた。収益はすべて在ニューヨーク日本国総領事館 Japan Earthquake Relief Fund、ジャパン・ソサエティーなどを通して東日本大震災の支援へ送られるとのこと。さまざまな立場、さまざまな形の追悼があるのだ。



<3月9日 総領事館での研究交流>

3月9日には、CJCAT (Japanese Community of Creative Arts Therapists) 主催、JAMSNET (Japanese Medical Support Network) と在ニューヨーク日本国総領事館の後援による研究交流「親密な関係における対人暴力の現状～日本とニューヨークの現状」が開催された。中村正さんが「親密な関係における対人暴力の現状～加害者への対応を踏まえて」、私が「親密な関係における対人暴力の現状～被害者支援の視点から」として日本の状況について講演した後、ニューヨーク側からアジア女性センター(NYAWC)が、米国でのDV対策、国際結婚とハーグ条約の問題など紹介してくれた。

その後、懇談会となったが、個人開業の臨床心理士、精神科カウンセラー、医師、看護師、ソーシャルワーカー、弁護士など、ニューヨークで活躍する日系社会向けメンタルヘルスの専門家たちと交流する貴重な機会となった。海外で生活

する移民、企業の在米駐在員とその家族、現地で結婚して市民生活を送る人などの家庭内暴力をはじめとしたメンタルヘルスの問題は幅広くあり、とくに国際結婚後、離婚した親子関係にかかわるハーグ条約の問題などはホットな話題で勉強になった。

これは直接、震災プロジェクトとは関りのないものだったが、実は、会場となった総領事館は、今年度のむつプロジェクトに参加して下さったむつ市長が昨年まで勤めていたところで、元同僚だった方々と御一緒したのだ。本当に面白いようにご縁がご縁を生み、巡り巡って戻ってくる。





<3月10日 911メモリアル>

この機会に 911 メモリアルを見ておこうと思った。2001 年 9 月のあの時、私は、シンシナチで開催される Ph.D の卒業式に出席するため NY へ行く旅行の手配を終えたところだった。結局、参加は取りやめ、無期限で参加できる卒業パーティのチケットが手元に残ったままだ。予定が少しずれていれば、巻き込まれていたかもしれない。

かつてのワールドトレードセンターがあった場所にある 911 メモリアルの地下に博物館がある。2014 年 5 月に完成したばかりらしい。チケットは結構高くて、ツアーガイド付きで 39 ドルしたが、ものすごい人だ。



博物館には、中核となる展示が 2 つあって、“In Memoriam” は、1993 年の世界貿易センター爆破事件と 2001 年 9 月 11 日に犠牲となった人々を偲ぶ追悼のための展示。“2001.9.11” は 3 部構成の歴史的展示。聴く時間はなかったが膨大な口述記録とともに、消防自動車、記念碑的な鉄骨の残骸、遺留品などが展示されていた。



これは事件後の廃墟に最後まで残っていた「最後の柱」で、写真やメッセージがたくさん貼ってあった。



メモリアルホールにある青い壁には、“No Day Shall Erase You From Memory”（「いかなる日も、あなたを時の記憶から消し去ることはできない」）と書かれていた。古代ローマの詩人ウェルギリウスの言葉だそうだ。

外へ出ると、かつてツインタワーがあった跡地の庭に、ノースプール、サウスプールという大きな池が作られており、犠牲者の名前が刻まれていた。



NY では 3000 人近くの人が犠牲となり、あの衝撃は世界中の多くの人が多かれ少なかれ分かち持ったのではないかと思っているが、それにしても、アメリカがその追悼にどれほど大きなお金をかけているかは想像を絶するものがある。アメリカでは国内が激戦地となったことがないだけに喪失の大きさを表しているのかもしれないし、追悼が政治的であることを反映しているのかもしれない。

犠牲者の冥福とともに、どこにも追悼され得ない名もなき犠牲者たちの冥福を祈った。

<3月10日TCIでの報告会>

10日18時～20時は、漫画展会場にて報告会「東日本家族応援プロジェクトから見えた被災地の今」を開催した。8日の報告時間は限られていたため、これに肉付けし、とくに漫画展との関りから聞こえてくる声を中心に、現地の人々の声を紹介するようにした。続けて団さんからスライドショーと合わせた漫画トーク、

中村さん、院生の木下大輔さんからも報告があった。スタッフ以外の参加者は十名程度とこじんまりした会だったので、最後に皆でシェアリングの時間をもった。

遠方に暮らす者として、故郷を襲った惨事をどんなふうを経験したのか、被災した故郷へ戻って見た光景、そこからまた遠く NY に戻ったが、被災の経験を共有することができず苦しい思いをしたことなど、さまざまな体験が語られた。それだけに、県人会のつながりや、毎年活発に持たれている追悼式の意味が大きいことをあらためて思った。

震災時、距離的には遠く離れたところにいる人々の心の被災を考えた。現在被災地に暮らしていないが、そこが故郷で

あったり、特別な思い出があったり、あるいは大事な人がそこに住むなど、その地に強い思いを持つ人々である。その後すぐ、サンフランシスコの日本人コミュニティと関わる機会を持ち、その思いを強くした。

それが、ここでもずっと続いているのだ。きっと世界各地に似たような人々がいるのではないだろうか。そんなことにも思いを馳せることができるようになった。私たちのプロジェクトを被災地の外で行うことは、証人として被災地の状況を伝えるだけでなく、そんな人々がほんのひと時集い思いを合わせる機会を作っているのではないかと思った。災害が運んでくるもうひとつの出会いだ。



<3月11日 最終日>

3月9日、すでにカフェでインタビューをしたのだが、この日は John Jay College of Criminal Justice を訪問し、Nina Rose Fischer さんらに加害者臨床とカリキュラムについて聞く。



午後はセントラルパークを通り抜け、
メトロポリタン・ミュージアムへ行った。
頭の中で、みんなの歌「メトロポリタン・
ミュージアム」が鳴り響く。





夜はハーレム Jazz ツアーに参加してみた。3軒の Jazz バーを梯子したが、うち1軒は、帰還兵たちのたまり場になっているようだった。正直、話を聞いてみたいところだったが、そういう場でもないので断念。慌ただしいツアーだったが、充実したNYだった。

つづ

